宮本亞門（みやもとあもん）／演出家

昭和33年、東京・銀座生まれ。
銀座の喫茶店に生まれ育ち、幼少期から演劇や映画に親しむ。
ダンサー、振付師を経て、昭和62年に演出家としてデビュー。
平成16年に東洋人初の演出家としてオン・ブロードウェイにて「太平洋序曲」を上演、トニー賞4部門にノミネートを果たす。
ミュージカル、オペラ、歌舞伎など国内外で120本以上の舞台作品を演出。

ハラスメントを防ぐ仕組み

僕はアメリカでインティマシーコーディネーターに言われました。「あなたは演出家でパワーを持つ立場です。つまり、あなたの一言がパワハラになることがあるのです。社長や部長などと同じく、人に指示をする立場の人は、その言葉によってパワハラが成り立つということをまず考えてください」と。

役者は嫌なこと、つらいことがあったら、インティマシーコーディネーターに相談するんですね。「上司である演出家や監督に直接言えばいいのではないか」という意見もありますが、実際は、言えないから苦しんでしまうのです。「上司に言ったら嫌われるんじゃないか」、「仕事がなくなるんじゃないか」、「周りの人からどう思われるのか」、いろいろ不安になって我慢し、傷付いていくんですね。自分の気持ちを言えない息苦しさは、職場、学校、家、どこにでも当てはまることです。

今始まっている大きな変化は、悪気なく言ったことや指示、指導がパワハラやセクハラになることがあると、多くの方が知り始めたことです。また、言われた側は、本当の気持ちを言いづらかったら、第三者に相談して、ひとりで抱え込まなくてもいい状況ができつつあることです。僕自身を含めて、ハラスメントになり得ることをあぶり出して、してはいけないことについて価値観をアップデートさせることが必要です。

話し合いができる雰囲気づくり

アメリカでは、パワハラやセクハラの加害者として訴訟を起こされたら、加害者や会社はイメージダウンしますし、ビジネスにも大きなマイナスになります。アメリカで作品を上演した際に、出演者、制作サイド全員が、2日間ハラスメントについての授業を受けました。仕事中のいろいろな場面でハラスメントになりかねない問題が起きたときに、それをどう解決するのかという内容です。正解があるわけではないのですが、常に周りの人と話し合う大切さを学びます。それぞれが自分の意見を言える職場は、結果的にはよい成果を生み出すと思います。

その授業で大切なことは「間違ってもいい」ということです。社長などパワーのある側の人間が、部下と話し合いをするときに、ハラスメントの加害者になることを恐れて、話しづらくなることもあり得ます。でも、萎縮するのではなくて、話してみて、もしハラスメントになってしまった場合は、「ごめん、悪かった」と謝って、次は改善してプラスにしていけばいいんです。

演出家や社長が、職場や人をまとめたいのなら、パワーと勢いで押し切った方が、時間も手間もかからないので楽だと思います。しかし、そうした古い習慣でやってきたことで、今ハラスメントの問題があふれ出ているわけです。まず、役者や部下の気持ちを聞くことが本当に大切なんですよね。

遠くから自分を客観的に見てみる

僕も含めてなんですけど、人って善人と悪人がいるわけではなくて、人それぞれがいろいろな感情を持っています。そこが人の素晴らしいところなのですが、少し間違えると人を傷付けてしまうことがあります。だから、冷静に客観的に自分を見て、自分の感情をコントロールすることが大切だと思います。僕も反省しながらですが、自分がした行動はどうなんだろう?と、なるべく空の高いところ、日本全体、地球全体を見るイメージで遠くから自分の行動を見るようにしています。

日々いろいろなことが起きて、苦しいこと嫌なこともありますが、悩み過ぎたり、カーッと怒ったりしなくてもいいんだと、自分を客観的に見るようにすると、日々が楽しくなるんじゃないかなと思います。僕たちは、ハラスメントの加害者、被害者、傍観者になる可能性があります。そのことを忘れずに、もし自分がハラスメントになることをしてしまったら、相手に謝って、話し合いながら、面白く暮らしていけたらいいなと思っています。